

## 論文の内容の要旨

論文題目 高機能広汎性発達障害における道徳性の研究

指導教員 加藤進昌教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 14 年 4 月入学

医学博士課程

脳神経医学専攻

氏名 武田俊信

狭義の高機能 ( $IQ \geq 85$ ) 広汎性発達障害 (HFPDD) のある児童・生徒 23 人 (検査施行時平均月齢 112.9 ヶ月: 男 20 人、女 3 人: 自閉性障害 5 人、特定不能の広汎性発達障害 10 人、アスペルガー障害 8 人) と年齢、性、IQ、言語性 IQ、動作性 IQ および両親の社会経済状況をマッチングさせた定型発達をしている児童・生徒 23 人について道徳性検査および他の諸検査の結果を 2 群間で比較検討した。

イラスト付の質問文により道徳性の内面化レベルを評価する内面形成 (総合と因子分析により抽出された 3 つの下位項目、思いやり・自己確立・生活規範よりなる) において HFPDD 群は control 群に比して有意に総合、思いやり、生活規範で標準得点が低かった。有意差のみられた 3 つの項目でマッチングの指標とした項目と道徳性検査の結果において影響が大きいと予想される Wechsler Intelligence Scale for Children-III (WISC-III) の群指数の言語理解、下位項目の理解を共変量とした共分散分析で 2 群の道徳性検査の結果を比較したところ、思いやりで理解を共変数とした場合以外はやはり 2 群間で有意差が認められた。

内面形成のレベルは 4 段階に分かれており、各項目で年齢には依存せず両群ともにほぼレベル 3 (規範遵守型) 以上となっていたが、レベル 4 (自立愛他型) に達するものは特に HFPDD 群で少なかった。これは年齢を重ねてもコールバーグの後慣習的・原理的水準に達するものは稀であるというこれまでの定型発達児・者の報告と一致していた。思いやりで HFPDD 群の 7 名がレベル 2 (他者指向型) となっていたのが際立っていた。これに関しては、HFPDD 群においては共感能力に問題があり、思いやりでは他の項目に比してこの能力を要求される、あるいは自己確立や生活規範に関することは日常生活上ある程度明示化されたルールとなっていてわかりやすく、身近に接するものからたびたび注意を受ける機会が多いが、思いやりに関しては具体的なアドバイスを受け

る機会が少ないという、2つの理由が関連していると思われた。

HFPDD 児は、特に傷害、窃盗など明示化されているルールに関していえば、ほぼ規則遵守のレベル 3 にあり、少なくとも単純に禁止されている行為だと知らなかったという理由で触法行為に至るといったことは考えにくく、これまでの報告を参考にすると、好奇心や衝動と自己統制のバランスなど他のファクターが大きく影響を与えていると推測された。

短文に対する 4 件法の選択肢により道徳行動の実現度を評価する行動傾向（内面形成と同様に総合と 3 つの下位項目よりなる）では全ての項目で有意差がみられなかった。原因の一つとしては、メタ認知に障害があると云われる HFPDD に自己申告による評価をしてもらったことが考えられる。一方で、HFPDD 児は一度獲得したルールは杓子定規といえるほどに遵守するというのもよく云われるところであり実情を反映している可能性もあると思われた。

HFPDD 群内で、心の理論通過群と不通過群、下位診断、ウイングの分類（孤立型、受動型、積極奇妙型）で道徳性検査の項目における有意差はみられなかった。狭義の高機能である限り PDD の下位診断や外面的行動様式による分類といった下位分類にこだわらずに HFPDD という広い枠組みで捉えることでよいと思われた。

道徳性検査と WISC-III の関係では、HFPDD 群では内面形成と群指数の言語理解、下位項目の知識や理解といった言語能力に関する項目が有意な相関を示し、2 群間の相関の差の検定でも有意差がみられた。HFPDD のある児童・生徒においては断片的ではあるが WISC-III の言語能力と関連する項目と道徳性検査の項目間で有意な相関がみられるのが特徴的であり、定型発達をしている児童・生徒ではそのような相関はみられなかった。このことから定型発達をしている児童・生徒においては言語能力のみとは大きく関連しない道徳性を HFPDD を有する児童・生徒では比較的優れた言語能力で補おうとするが、共感など何らかの不足により全体として定型発達をしている児童・生徒と有意な差がでてしまうと推察された。

道徳性検査と新版 S-M 社会生活能力検査の各項目の関係では HFPDD 群で内面形成の総合と全社会生活指数（SQ）、内面形成の総合と身辺自立 SQ、内面形成の総合と集団参加 SQ、内面形成の思いやりと全 SQ、内面形成の思いやりと集団参加 SQ で HFPDD 群で有意な相関が認められ、かつ 2 群間の相関係数の差の検定でも有意差が認められた。内面形成の総合、思いやりと集団参加 SQ に有意な相関がみられることに関しては、道徳性の内面化が成熟して初めて集団参加が可能となり、また集団参加を重ねることで道徳性を内面化が進展するという、双方向性の過程が想定された。

定型発達をしている児童・生徒では今回の研究で施行した諸検査により道徳性の内面形成水準を推し量ることは困難だったが、HFPDD のある児童・生徒においては、新版 S-M 社会生活能力検査の全 SQ、WISC-III の理解、WISC-III の知識といった項目によりある程度は道徳性の内面形成の水準を推測することが可能であった。これらにより治療教育・医療上の有用な示唆をえることができた。